Association of Disability Sciences, Japan

障害科学研究, 35, 95－107, 2011

資　料

昭和初期における日本点字図書館の事業継続要因として失明軍人の果たした役割

キャラミ・マースメ*・河内　清彦**

本研究では、昭和初期における、日本初の専門的点字図書館である日本点字図書館（日点）の事業を継続させた要因と、その要因を生起させた背景を検討した。様々な困難に直面し事業を継続できなかった従来の点字図書館と異なり、戦時下の辛い状況にありながらも政府から一切の資金援助を受けることなく、この時期を乗り越えた日本点字図書館事業の継続を支えた要因として①点訳運動②金銭的な援助があげられる。特に、点訳運動は、日本点字図書館の創立以来、一番の障害であった点字図書の不足を補うため、東京を中心に当初よりボランティアによって支えられていた。この運動が、戦争によって日々増加していく失明軍人たちに対して同情し援助したいという気持ちを抱いていた国民に広く歓迎された。戦争下の社会において、点字図書館事業の継続は、図書館員の強い努力だけでなく点訳運動や金銭的な援助により成り立っていた。その際、日本点字図書館が援助を獲得する上で日本点字図書館の利用者と同じ痛みを抱えていた失明軍人は大変重要な存在であったと考えられる。

キー・ワード：日本点字図書館　点訳運動　失明軍人

Ⅰ．序　文

1．研究の目的

昭和初期においては、点字図書が不足していたため盲人の読書環境は現在と比較してかなり劣悪であった。当時、点字図書として出版されていたものの大部分は按摩・鍼・灸に関するものであった。前近代より日本の盲人の主な職業は按摩・鍼・灸であり、鍼按関係の図書に対する需要は高く、営利を目的とする出版はこの分野に関しては大量に行われたためである。この傾向はほとんどの点字出版社に共通しており、当時の盲人たちは按摩・鍼・灸の本を手に入れることは比較的容易にできた（日本点字図書館50年史編集委員会，1994）。これに対して、他のジャンルの点字図書に対する需要は低かったため、点字図書の製作費が高くなり、実際に出版された点字図書は原本と比べ約4～5倍と高価なものとなり、一般の盲人は高価な点字図書を購入することはできなかった。購入以外に点字図書を入手する方法には、図書館からの貸借があり、昭和初期において、点字図書を読める場所としては、主に次の3箇所があった。

・盲学校の中の点字図書館
・盲人福祉施設の点字文庫、点字図書館
・公共図書館の中に設備されている点字文庫や点字図書閲覧室（野口，2005）

しかし、これらの点字図書館で貸出可能な図書も、多くが鍼灸や宗教に関するものであり、他のジャンルの点字図書はごくわずかであった。このような当時の状況に一石を投じたのが日本点字図書館の設立であった。

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
** 筑波大学大学院人間総合科学研究科（障害科学系）

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

日本点字図書館の創設者である本間一夫（1915-2003）は、自身も視覚障害者であり、好本督の影響から、日本の視覚障害者教育のためには点字図書館が必要であると考え、1940（昭和15）年11月10日、学生時代からの夢であった日本点字図書館（当時は日本盲人図書館）を、自費を投じ700冊の点字図書により開設するに至った。日本点字図書館における点字図書の貸出方法は、その多くが郵送によるものであった。図書館の利用者は当初より、東京はもちろんのこと、日本全国、北は樺太、南は台湾、さらに朝鮮、満州に渡っていた。このように、地元以外の利用者への貸出を行っていたのは日本点字図書館だけであった（斉藤，1962）。

日本点字図書館の成立に関する先行研究としては、斉藤（1962）の研究成果が最も体系的である。これは、日本点字図書館を中心としつつ、名古屋市立鶴舞図書館の点字文庫や、視覚障害者のための支援事業を行っている社会福祉法人日本ライトハウスの点字本貸出業務などの開設当初の状況に触れながら、1952（昭和27）年までのそれらの図書館における点字蔵書数、利用者数、貸出冊数などのデータを分析したものである。その中で、日本点字図書館の事業を支えてきた要因として、点訳ボランティア（墨字図書を点字図書に翻訳するボランティア）や金銭的援助が挙げられている。しかし、日本点字図書館の事業の継続要因を明らかにするためには、開設当時の社会情勢を踏まえ、戦争と日本点字図書館の関係を検討することが不可欠であると考えられる。斉藤（1962）は、日本点字図書館の事業を継続させた２つの要因としてボランティアによる点訳運動と、様々な団体からの金銭的な援助を簡潔に取り上げてはいるものの、これらの援助がなぜ、戦時下という人的にも経済的にも厳しい状況において拡大していったのか、という問題についての考察は行っていない。

そこで、本研究では昭和初期における、日本点字図書館の事業継続の２つの要因として挙げられている点訳運動や金銭的な援助について検討し、それらの要因を生起させた背景を明らかにすることを目的とする。より具体的には、日本点字図書館は、戦争によって生じた失明軍人が国民の目にさらされるようになった時期に設立された。日本点字図書館にとって上記の金銭的な援助や点訳奉仕は欠かせない支えであり、その支えを提供してもらうにあたって、失明軍人の貢献が大きかったと考えられるため、本研究では、この点を掘り下げたい。

対象時期は、昭和初期（昭和元～20年）とする。なぜならこの時期は、日本における点字図書の不足の問題が従来に比して著しく深刻化し、その対策として日本点字図書館が誕生した時期であるとされる（谷合，1998）とともに、日本点字図書館の活動を支えた点訳運動が活発となった時期だからである。このように、本研究において昭和初期における日本点字図書館の事業に焦点をあてることは、日本の盲人の当時の読書環境を考察する上で、重要な知見をもたらすと考えられる。

２．研究方法

本研究では、昭和初期における日本点字図書館の状況を把握するにあたって、当時の資料や文献を用いて研究を行った。主な資料としては、日本点字図書館の年次利用者数、蔵書数、当該館出版物等の年次事業概要、及び年次事業実績、そして日本点字図書館に関係する新聞記事を用いた。

Ⅱ．昭和初期における点字図書を取り巻く状況

ここでは、日本点字図書館がどのような状況で設立されたのかを把握するため、当時の点字出版事業や点字図書館の状況を簡潔に整理する。

１．点字出版事業

点字図書の特徴の一つは、一般的な墨字図書と比較して高価なことである。価格が高価な原因の一つは、点字そのものの特徴にある。点字は表音文字であり、墨字と比較すると一文字が大きい。また、点字図書は触読するため、厚い紙が使用された。そのため、一冊の墨字図書を

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

点字図書にすると数十冊になるほど分量が増し、点字図書に必要な用紙代、刷代そして製本代は、墨字図書と比較して高価であった。このことは当時も現在も変わらない。さらに、本研究の対象である昭和初期は、点字を読める盲人が少なかったため、読者の数が少ないうえに高価な点字図書の出版は、営利事業として成り立たなかった（斎藤，1962）。

昭和初期においては、民間の点字出版事業が国からの公的支援なしに展開されていたが、その多くの事業は戦争によって中止された。このように点字図書が不足している状況は緩和されないまま戦後も続いていた（谷合，1998）。このような状況において、点字図書の不足を解決するために点訳運動が生じた。その運動は、1929（昭和４）年、岩橋武夫による社会福祉法人日本ライトハウスの「フレンド点字写本奉仕会」に始まり、その後、後藤静香らの「大日本点訳奉仕団」と「点字奉仕会」によって日本全国に広まった。これらの運動により、戦争の厳しい社会状況下においても点字図書の点訳・製作が絶えず行われていた（本間，1980）。

２．日本における点字図書館の状況

日本における点字図書館の運動は、当初、盲学校の一室にあったわずかな点字図書から出発した。盲人図書館に関する文献の一つとして、明治39（1907）年９月６日の『万朝報』に掲載された東京大学英文科出身の山形五十雄による「日本現時の盲人社会」と題する一文があげられる。これは、（一）盲人学校の不足（二）盲人諸君の奮起、そして、（三）盲人用図書館の必要、を３回で連載して点字図書館の必要性を呼びかけたものであった（竹林，1955）。

このようにして、点字図書館の芽が日本において出始め、昭和４（1929）年１月、鹿児島県立図書館では、点字図書300冊を備えて、盲人閲覧室を開始した。ほぼ同時に、徳島県立光慶図書館、石川県立図書館、名古屋市立鶴舞図書館がそれぞれ点字文庫を付設し、その地域における盲人に対する図書館事業が開始された。

しかしながら、昭和初期には、点字出版事業への国からの公的援助はまったくなく、その経営は困難を極めた。さらに、点字出版に尽力した先人たちの努力とその業績は、一部を除いて戦争のために消滅してしまったのである（谷合，1998）。そのため、当時、点字図書を買い集めることは容易ではなかった。すなわち、購入した図書のみによって点字図書館事業を続けることは不可能だったのである。

では、なぜ日本点字図書館の事業は継続できたのであろうか。ここでは、日本で最初の盲人に対する全国規模の図書館サービスである日本点字図書館の事業の継続の様子、そして継続の要因を考察したい。

1941～45（昭和16～20）年の蔵書増加数と貸出数、その内容を、Table１～３に示す。ただし、1944、45年の茨城、北海道疎開時代の詳細は不明である[1)]。

Table１　蔵書の増加数と貸出冊数

年度	蔵書（冊）	貸出数（冊）	備考
1940（昭和15）	700		無料貸出
1941　（16）	1,300	9,846	
1942　（17）	1,700	12,145	
1943　（18）	2,300	10,505	
1944　（19）		11,865	茨城疎開時代
1945　（20）		2,534	北海道疎開時代

『日本点字図書館50年史』（日本点字図書館，1994）より作成

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

Table 2　貸出図書の内容

図書内容	年度（冊数と全冊数に対する割合）（%）		
	1941年	1942年	1943年
文学、語学	3,759（55.6）	6,857（56.4）	5,555（52.8）
医学（鍼按）	1,134（16.7）	1,918（15.7）	1,824（17.3）
社会科学	468（6.9）	825（6.7）	387（3.6）
盲人文献	419（6.2）	420（3.4）	370（3.5）
宗教・哲学	276（4.0）	514（4.2）	713（6.7）
児童書類	272（4.0）	535（4.4）	514（4.8）
地歴伝記	228（3.3）	601（4.9）	625（5.9）
自然科学	134（1.9）	281（2.3）	228（2.1）
音楽	32（0.4）	93（0.7）	165（1.5）
総記	32（0.4）	101（0.8）	124（1.1）
合計	6754	12145	10505

出典：『昭和16年度事業概要』（日本盲人図書館，1942）、『昭和17年度事業概要』（日本盲人図書館，1943）、『昭和18年度事業実績』（日本盲人図書館，1944）より作成

Table 3　年次利用者数

年	利用者数
1941	921名
1942	1,394名
1943	1,953名

『日本点字図書館50年史』（日本点字図書館，1994）より作成

Table 1～3から分かるように、点字図書館の蔵書数、貸出数そして利用者は確実に増加している。その中でも特に貸出数の半分以上を占めているのは文学の図書である。なぜ、文学書はそれほど盲人たちに利用されたのであろうか。先述の通り、前近代より日本の盲人の多くは按摩・鍼・灸を職業としていた。そのため、鍼按関係の図書に対する需要は高く、それらの出版は営利に繋がるため出版された。日本点字図書館においてもその種の図書の蔵書数と貸出数が多かったが、それらの図書は点字図書館以外にも流通しており、盲人たちにとってそれほど珍しいものではなかったのである。一方、従来の私立盲唖学校ないし盲学校の府県立移管は漸次増加をみたものの、学費が高いため学校に通える盲人は全体の2～3割ほどしかいなかった（加藤，1972）ため、点字を読める盲人は少なかった。そこで、需要の高い鍼按関係以外の図書は、文学を含め、営利出版の対象とならず、あまり出版されなかった。つまり、点字を読める盲人にとって文学書は珍しく、貴重なものだったのである。

このように、日本点字図書館の開設以前は、全国に配達を行い、しかも鍼按関係以外の図書を扱う専門的な点字図書館は存在しなかったため、日本点字図書館は全国の盲人たちに大いに歓迎された。

ここでは、そのような事実を日本点字図書館宛ての読者からの手紙（本間，1941）から確認してみたい。

A氏（宮崎市）

昭和十五年十二月廿一日

只今「図書館ニユース創刊号」いただきました。何の雑誌だらうと開き読んだ瞬間、夢ではなからうかとそのまゝ一気に読み終つて了ひました。私は嬉しいとももつ体ないとも云ひ様なき感激で思はず泣いて了ひました。それで、失

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

礼をも顧りみずこの手紙を差上げます、どうぞお許し下さいませ。先年、アメリカから帰られた横浜訓盲院の猿田、竹井両女史の感想文の一節にあちらでは今日の夕方借り出したい書物を通知すると翌日は必ず手許に届く図書館施設があるので少しも書に困らぬと御座いましたが、日本にもそうした誰でも自由に貸していたゞける図書館があつたらどんなに嬉しいだらう、特にお互ひ盲女子には高い書物を読む事が出来ればいまはしい色んな問題は自然なくなるのぢやなからうかとそれのみ考へてをりました。それが今度立派に実現した事は本当に喜ばしい事実で御座います。どんなに全国の盲人が感謝してゐるか知れません。どうぞ私も利用者の一人にお加へ下さい。

B氏（熊本市）

昭和十六年五月十七日

拝啓、私は当地にてお琴の師匠をして居ります。先達日、知人山本国義様から「こんな結構な図書館が出来ましたから是非利用しなさい。これを読んでみなさい、人間は本を読まなくては駄目だ、こんな面白いのを始めに読んで読書の習慣をつけなくてはいけない」と宮本武蔵と云ふ本を読ませて下さいました。とても面白くまるで本の中へ身も魂も吸ひ込まれて行くやうでした。こんな嬉しいことは、生れて始めてでした。これからは私にも本をお貸し下さい。図書館の規則は厳重に守ります。又時には少しづゝ御寄付させていただきたいと思ひますが如何でせうか。何分宜しくお願ひ致します。

C氏（岐阜県）

昭和十六年十月十日

「大地」一巻から四巻まで深い感激の中に拝読出来ました。王龍が土に対していだけるあの強い情熱を我々も鍼按術にもつて、この臨戦体制下職域奉公に精進したいと決意させられました。御館から送られる色々な書物に接するごとに私はある時は慰められ、或る時は又はげまされました。読書力も益々盛んになるのを感じます。私達盲人の生活には健全な趣味とか娯楽とかがなく、又何を研究したいにも参考となるべき書物もない現状に御館は幾千冊の蔵書獲得を目標として着々その実績を挙げつゝやがて一周年を迎へやうとしてをられます、盲人文化建設のためまことに慶賀にたへません。私も微力ながら御館発展のため努力致します。皆様も益々御奮闘あらんことを。

以上の読者からの手紙からも明らかなように、日本における初めての盲人に対する全国規模の図書館サービスだった日本点字図書館の事業は全国の盲人たちに大いに歓迎されていたである。そしてこの事業は、後述のように、人的にも金銭的にも全国の多くの人々によって援助されていた。

Ⅲ．日本点字図書館の事業継続を支えた要因

日本点字図書館についての先行研究、特に、斎藤（1962）の研究では、日本点字図書館の事業を継続させた２つの要因として、ボランティアによる点訳運動及び様々な団体からの金銭的な援助が取り上げられている。ここでは、この２つの要因はどのようなものであるか、また、点字図書館の事業の継続及びその成功にどのように影響を及ぼしたかについて簡潔に見てみたい。

１．人的な援助

日本点字図書館の活動を人的に支えていた代表的な団体として、次の２つの点訳ボランティア団体があげられる。

・大日本点訳奉仕団（団長：後藤静香）

・点字奉公会（会長：井上当蔵）

前者は、公式に創立される以前に、すでに点訳者育成の第１回講習会を1940（昭和15）年11月３日に開催していた。それは、日本点字図書館が創立される１週間前のことである。その後、この講習会は、毎月２回、後藤静香と本間一夫の出席をもって開催されていった。後藤は、図書館開館の１週間前の1940（昭和15）年11月３日、自分の晴眼の弟子たちを対象とした点訳講

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

Table 4　増加した蔵書の内訳

	1941年	1942年	1943年
増加蔵書	614	450	706
購入蔵書	391	200	97
(増加蔵書総数に占める割合)	63.6%	44.4%	13.7%
寄付蔵書	145	55	389
(増加蔵書総数に占める割合)	23.6%	12.2%	55.0%
点訳蔵書	78	195	220
(増加蔵書総数に占める割合)	12.7%	43.3%	31.1%

出典：日本盲人図書館『昭和16年度事業概要』(日本盲人図書館、1942年)、日本盲人図書館『昭和17年度事業概要』(日本盲人図書館、1943年)、日本盲人図書館『昭和18年度事業実績』(日本盲人図書館、1944年) より作成

習会を設立し、自著の『一日一話』を初め数多くの本を点訳していった（斎藤，1962)。このように、後藤静香の率いた大日本点訳奉仕団は、本間一夫の日本点字図書館を戦後に至るまで支え続けた。また、この団体の規約では次のように定められている。「本団員の点訳書は成るべく点字図書館等に寄贈して広く盲界の便を図るものとす」(本間，1943)。

後者も、1943（昭和18）年4月9日、「点字奉公会」の第1回講習会が開催された。その後、講習会は毎週昼と夜のそれぞれ1回ずつ開かれ、会長の井上当蔵と本間一夫も出席したのであった。

この2つの団体は、日本点字図書館の創立以来、日本における点字図書館創設の一番の課題であった点字図書の不足を補うため、当初より点訳運動によって日本点字図書館を支えていた。この2つの団体の存在は1943（昭和18）年3月9日付『朝日新聞』と20日付『毎日新聞』などの大新聞でも報道され、国民に幅広く知れわたった。

戦争の混乱の中でも、点訳運動は絶えず継続され、点字図書館が東京から茨城や北海道に疎開した1944（昭和19）年3月以降においても、毎月約5冊の点訳図書が茨城県や北海道に送られていた（本間，1980)。戦時下においても、点字図書館の増加図書の約3分の1は点訳図書であり、点訳図書は戦争の混乱の中でも着実に増加していたのである。

Table 4からは、購入した蔵書が年々減っていくことが分かる。おそらくこれは、戦争のため物質的にも財政的にも点字図書の出版が困難となったことに起因しているだろう。このような状況においては、寄贈による点訳の蔵書が、購入による蔵書の不足を補っていたのである。

このような点訳運動について、後に本間一夫は次のように述べている。

「昭和十八年三月九日付の朝日新聞は『盲人の点字図書館生る、戦傷勇士に希望の光』というタイトルで、大日本点訳奉仕団（団長・後藤静香）の誕生と活動を、五段抜きの大記事で報道し、次いで二十日には、毎日新聞が、『高き文化の点字本』という見出しで、井上英会話スクール校長井上当蔵夫妻の発起で失明兵士に点字本をおくる『点字奉公会』が結成されたことを報じ、点訳を勉強してくれる人は有楽町の同校で開かれている点訳講習会に出席して欲しい、と訴えてくれました。これらの記事は意外なほど大きな反響を呼びました。その第一回の講習会が開かれたのは四月九日でしたが、その時は若い婦人を主に百人もの人が教室にあふれて、講師をつとめた私たちを驚かせたものです。」(本間，1980)。

すなわち、点訳運動は「戦傷勇士に希望の光」を与える、銃後社会の美談的な運動として大新聞によって宣伝され、社会へ普及していったの

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

である。

本間の回想によれば、「点訳運動により育った点訳奉仕者が無料で作る点字書による蔵書の増加がなかったら本図書館もそれ以前の点字図書館と同様の運命をたどっていただろう」（日本点字図書館50年史編集委員会，1994）と言うほど、実際の点字図書館事業を支えていたのはボランティアの点訳者たちだったのである。

2．金銭的援助

次に、日本点字図書館の事業継続のもう一つの要因とされる、金銭的な援助がどのようなもので、それらが日本点字図書館の事業の継続にどのような影響を与えたかについて考察したい（Fig. 1参照）。

先述の通り、点訳奉仕により点訳図書の不足が解消されていったのだが、そのような状況において、本間一夫と加藤善徳は、1943（昭和18）年、それまでは2階建ての小さな借家だった日本点字図書館を、新たに別の場所に建設する計画を立てた。

図書館の土地は、1941（昭和16）年に本間一夫が買い求めていた250坪の土地であり、それまでは住宅を建てていたが、1943（昭和18）年7月18日、2階建て32坪の日本点字図書館を同敷地内に併設したのであった。

なお、本間（1941；1980）によれば、寄付金や物質的な援助は、日本点字図書館の新築の際だけではなく、図書館開設当初より様々な方面から寄せられており、本間（1941；1980）にはその具体例が記載されている。

また、「日本盲人図書館敬助会」という一種の後援会が日本点字図書館を支えていた。これは、社会事業として図書館の財政面を支援するため、1942（昭和17）年5月、盲人協会会長橘

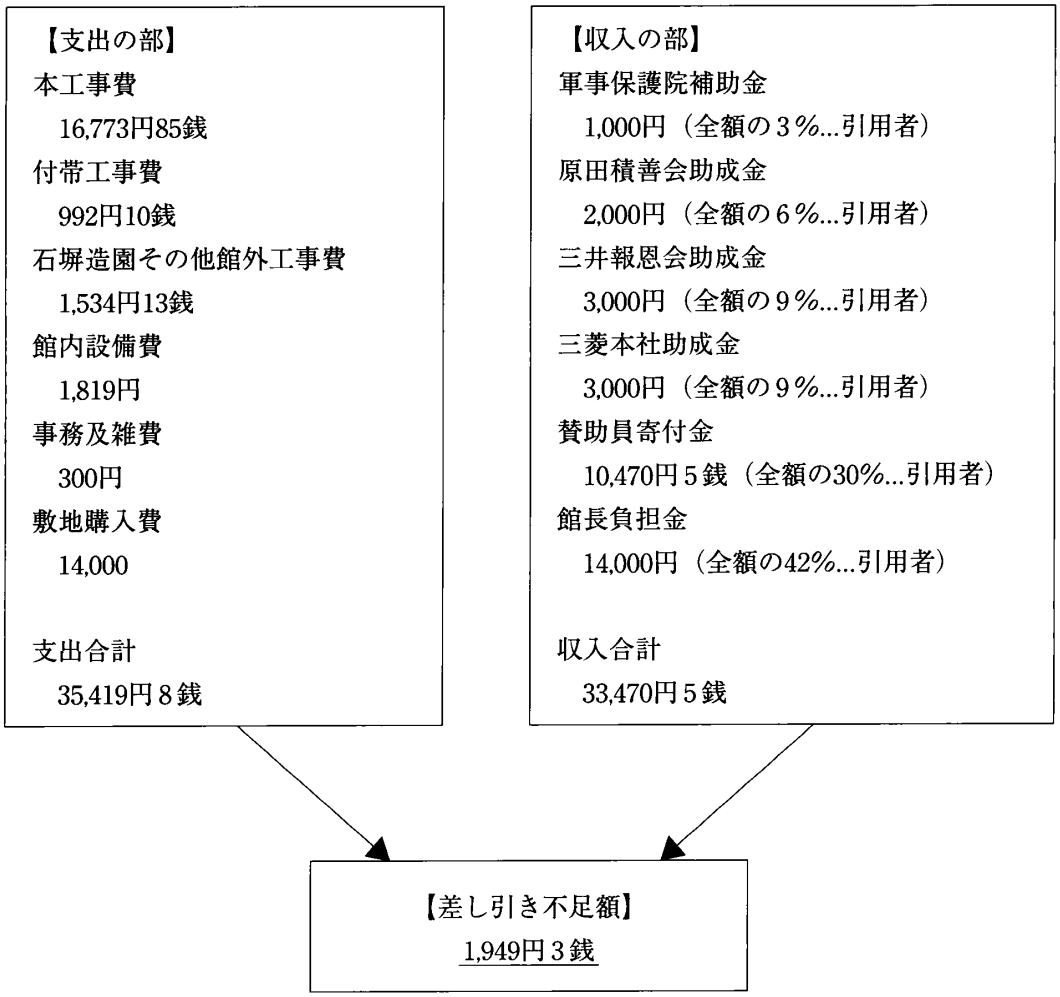

Fig. 1　図書館建築費決算書（日本盲人図書館，1943）

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

江氏などの発起により、利用者によって創設された会である。その会の特別会員の会費は年額5円、普通会員は1円であり、当時の図書館にとっては、大変大きな援助であった（本間，1980）（Fig. 1参照）。

では、このような事業は、なぜ戦時下という経済的にも物質的にも厳しい状況において発展を遂げたのであろうか。この疑問を解決するためには、戦争が生み出した盲人、すなわち失明軍人と日本点字図書館との関係を解明することが必要であると考えられる。なぜなら、日本点字図書館が1941（昭和16）年度以降毎年発行していた「事業概要」の中には、必ず失明軍人が登場するからである。

Ⅳ．失明軍人と点字図書館事業

先述の通り、1943（昭和18）年7月に完成した日本点字図書館の新しい建物は、35,419円の建築費を必要としたが、そのうちの1,000円は失明軍人を含む戦傷病者を保護していた軍事保護院が寄付したものであった。このことから、日本点字図書館の事業継続における失明軍人の役割の重要性が示唆される。

そこで、ここでは失明軍人と日本点字図書館の関係について考察したい。具体的には、失明軍人の存在が日本点字図書館の2つの大きな支えであった点訳運動や金銭的な援助にどのような役割を果たしていたのかについて検討する。

1．失明軍人の増加と治療施設における訓練

日清戦争（1894～1895年）、日露戦争（1904～1905年）、満州事変（1931年）、日中戦争（1937年）、そして太平洋戦争（1941年）と続く戦争の中で、日本の傷痍軍人の数も増え続けた。特に日中戦争以降は、戦況がますます激しくなるにつれ、失明軍人を含め傷痍軍人は急増した。その数はTable 5の通りである。

では、失明軍人は社会的自立及び社会復帰のためにどのような援護や訓練を受けていたのだろうか。ここでは、そのような援護や訓練が日本点字図書館の事業の継続に及ぼした影響について考察する。

アジア・太平洋戦争期の失明軍人は、東京牛込の第一陸軍病院（現在の国立東京第一病院）第二外科にある「戦盲病棟」という病棟に収容されて治療を受け、その後「院内訓練」という各種の訓練を受けていた。

院内訓練とは、カウンセラーによる心理的な更生指導をはじめ、コミュニケーションの手段としての点字、カナタイプ、ハンドライティングなどの指導を主とし、そこには歩行訓練や各種のレクリエーションなども含まれていた。つまり、ここでは社会に復帰するために必要な点字など新職業教育2）の土台及び日常生活に必要な基本訓練（歩行など）が提供されていた。この第一陸軍病院の「戦盲病棟」でそのような訓練や指導を受けていた松井新二郎は、この「院内訓練」について以下のように回想している。

「失明した患者が自力で障害を受容していくには、ある程度長い時間が必要です。そのための訓練、今で言うリハビリテーションでは、陸軍病院は理想的でした。

苦しい自問自答を経て、点字を覚えていく。

Table 5　戦傷視覚障害者数（1968年4月1日時点）[3)]

区　分	実　数（人）	構成比（%）
総　数	13,714	100
特別項症～第2項症	1,243	9.0
第3項症～第4項症	899	6.6
第5項症～第6項症	9,793	71.4
第1款症～第5款症	1,735	12.7
第1目症～第2目症	44	0.3

出典：『世界盲人百科事典』（日本ライトハウス，1972年）より作成

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

それを教えるのは、盲学校からやってくる先生たちでした。そして、失明した先輩が後輩に、自分の苦しみや失敗、成功を語っていく。病院の中で自然に、グループ・カウンセリングが行われていたのです。（中略）何より素晴らしかったのは、患者一人ひとりの社会復帰に向けて、様々な分野の専門家で構成される「委員会」が設置されたことです。眼の治療を担当した医者、病院の援護系とともに、大学の心理学者や軍事保護院の授助の専門家などが、私でいえば「松井委員会」というものをつくり、私の能力や可能性を分析し、家族関係や家庭の状況まで把握して、将来の自立の方向を示してくれたのです。」（松井，1990）。

2．新聞報道にみる失明軍人と日本点字図書館

ここでは、失明軍人が新聞によってどのように国民に紹介されたのかを明らかにする。中でも、新聞において、失明軍人と日本点字図書館との関係がどのように描かれていたかという点に焦点をあてる。

対象の時期の新聞に掲載された約99%は、第一陸軍病院、及び失明傷痍軍人寮と失明傷痍軍人教育所に関連した記事である。例えば、開設する１ヶ月前に失明傷痍軍人寮と失明傷痍軍人教育所を紹介した1938（昭和13）年８月22日付『東京朝日新聞』には、「失明勇士を再生へ導く二つの道場来月から帝都に開設」というタイトルの記事があり、その寮の設立の目的について「傷兵保護院ではかねてから両眼を失った失明勇士の保護対策を考究中のところ、勇士たちに光明を与える修養道場『失明軍人療』と立派な社会人としての教養をあたえる『失明軍人教育所』をつくることとなる」と書かれている。

また、1938（昭和13）年11月８日付の『大阪毎日新聞』は「失明勇士へ贈る再教育の家　軍人寮と教育所開く」というタイトルで、上記２ヶ所の開設式の様子を次のように報じている。

「全国失明軍人を再教育する失明軍人寮ならびに教育所式は七日午前十時半から東京小石区東京高師附属小学校講堂で挙行、本庄傷兵保護院総裁、木戸厚相、（中略）陸、海、文各相代理、本野愛国婦人会長、林傷痍軍人会長ら関係各方面の名士三百余名のほか、特に日露役失明軍人小田龍造氏ほか四氏も臨席、入所を予定されている白衣軍人60名も出席して開式、本庄総裁を初め各大臣の祝辞についですでに入所中の寮生14名の代表鈴木勉治兵曹長が答辞を述べ同11時50分閉式した。」

この期間の新聞は、失明傷痍軍人教育所と失明傷痍軍人寮で教育と訓練を受けた失明軍人についての記事が主であった。新職業教育をいかに活かし、いかに新職業に利用しているかが報じられている。

以上のことから、国から提供された様々な訓練や心理的指導は、失明軍人にとって、自身の障害を受容しそれを乗り越えるために、非常に効果的であったと考えられる。具体的には、治療施設では、社会に出る前の段階として社会的な自立に必要とされる訓練はほぼ与えられていた。また失明軍人は様々なカウンセリングや同じ痛みを経験した先輩たちの指導やアドバイスによって精神的に支えられ、そして点字を学習することで読書や職業復帰に対する下地を用意していったのである。

特に重要なのは、点字の習得であった。なぜなら、点字を学習することで、彼らの読書及び職業復帰や新たな就職に対する基礎的な準備をすることができたからである。これに対し、当時の盲児の就学率は極めて低く、その実数は文部省統計の数字をはるかに下回っていた。例えば、1931（昭和６）年の茨城県下の調査によると、学齢盲児79名中、学費の高さなどの原因により、就学者はわずか４名に過ぎなかった（加藤，1972）。このことから、当時点字を読める人がどれだけ少なかったかということを把握することができる。こうした状況の中で、失明軍人が治療施設において点字を学習したことは、後に社会の人々の点字への関心や知識を拡大させることにつながったと推察される。

しかし、何よりこの時期に特徴的なのは、点訳に関連した記事が掲載されるようになったと

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

いうことである。先述の通り、点訳運動は社会福祉法人日本ライトハウス附属の「フレンド点字写本奉仕会」から始まったが、その後、日本点字図書館に関連する2つの点訳奉仕団体、すなわち、「大日本点訳奉仕団」と「点字奉公会」の活動によって広まった。日本点字図書館が設立された当初は点字図書の不足が一番の問題であったが、まさに、日本点字図書館開設と失明軍人の増加は同時期に生じており、失明軍人の教育問題と点字図書の不足問題は同時に語られ、点字図書の必要性が以前にも増して一般の人々に知られるようになったのである。

例えば、1941（昭和16）年5月21日付『大阪朝日新聞』夕刊には「日本最初の点字婦人会」というタイトルで次のような記事が掲載されている。

「「失明の傷痍軍人又は一般盲人」の「知識」や「心の糧となるものは点字に訳された書物より外はないが、日本は欧米各国に比べて点字文化が極めて貧弱で盲学校の教科書でも民間で作られたものを用いていく状態である。今回の関西点字婦人会は2年前から婦人たちが自発的に盲人のため、一は自分の修養のために」まさに婦人の「打ち込む社会事業として」はじめたものであり、今後「大いに同志に呼びかけることになったのである」」

以上のように1941～1943（昭和16～18）年の新聞は、点字図書館と点訳奉仕団体について報じる際、何よりも国民の援助と同情を引き寄せることを目的としていた。日本点字図書館所蔵のこの時期に関する新聞のスクラップブックには、失明軍人について、「両眼を戦場に捧げた勇士」、「肉眼を国に捧げた失明勇士」、「両眼をお国に捧げた失明勇士」、などと報じた記事が数多く登場する。失明軍人が国民に知られるようになった時期に設立された日本点字図書館にとって、点訳ボランティアは欠かせない支えであり、その支えを得るために「失明勇士」は大いに役立ったのである。

これまでの資料の中で、本研究の対象時期となる昭和初期に、失明軍人が設立されたばかりの日本点字図書館を直接利用したことを示す記録はみあたらないが、実際には、日本点字図書館は先述した点訳会を通じて、失明軍人の点字図書のニーズにある程度対応していたと考えられる。例えば、点字奉公会では、日本点字図書館の本間一夫館長を講師に点訳ボランテイアを養成し、点訳した図書を失明軍人が治療施設を出た後収容されていた失明軍人寮に直接提供しており、井上が率いた「点字奉公会」の規約にも次のよう事項がある。

「点訳すべき書籍は会員の自由選択としますが、重複を避けるため左記に照会の上着手します　　失明軍人寮日本盲人図書館」（井上，1943）。

このように点字奉公会とは、「失明軍人や一般盲人」に点字本を提供するために「失明軍人寮」及び「日本点字図書館」と連絡を取り合いながら点訳運動を行う団体であった。

また、当時の新聞のある記事によれば、火事で図書をなくした大学生の失明軍人は、直接本間館長に手紙を出し、必要な点字図書を点訳してもらっている（読売新聞，1943）。このような新聞の記事によって、国民は、身近に徐々に増加した失明軍人の点訳図書へのニーズを実感し、点訳ボランティアの増加やその活動継続に大きな役割を果たしていたのではないかと思われる。

また、失明軍人は日本点字図書館の様々な式典に出席した。例えば、先述のように図書館の新しい建物を竣工した1943（昭和18）年7月の落成式の際には40名の白衣の失明軍人が参列している（日本盲人図書館，1942）。

V．おわりに

戦時下において徐々に増えていった失明軍人と日本点字図書館との関係について考察した結果、当時の新聞報道により、失明軍人の治療、職業教育そして日常生活といった様々な側面が、詳しく国民に伝えられていた。重要なことは、点訳や日本点字図書館の事業を報じていた当時の新聞記事が、そうした事業が失明軍人の

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

ために行われていると報じていた点である。つまり、失明軍人の存在は日本点字図書館にとっては、軍事保護院（1943（昭和18）年7月の図書館新築に際し1,000円の補助金など）や国民点訳奉仕などから様々な援助と協力を引き出す力として働いていたのである。特に1942（昭和17）年以降、失明軍人が増加していくにつれて、もともと一般盲人のために作られた日本点字図書館は、援助を引き寄せるため「失明勇士」といった扇動的な用語を前面に押し出し、「一般の盲人」という用語は後景に退くことになる。失明軍人が日本点字図書館の利用者として社会に知られていったことが、図書館事業の継続に大きな正当性を与え、日本点字図書館の事業の2つの大きな支えであった人的、金銭的な援助を引き寄せる強い磁石として、戦争の生み出した失明軍人という存在が機能していたのである。

一方、このような国のために視力を失った失明軍人は、国民と国にとってはまさに尊敬すべき存在だったのである。

失明傷痍軍人寮が開設される前に3年間地方の盲学校で一般の盲学生と一緒に勉強し、一般の盲学校の雰囲気とその困難さを味わっていた第一期失明傷痍軍人寮生の近藤正秋は、失明傷痍寮生が国民にどう迎えられていたかについて以下のように述べている。

「昭和13年の末頃になると戦争は支那大陸の全土に拡大し、軍隊は日夜を分たず大陸に送り出され、国内は毎日戦勝の報にわきかえっていた。こうした雰囲気の中で失明軍人寮が開設されたので、開設と同時に慰問客が殺到し、毎日がお祭り騒ぎだった。机の上にはとっかえひっかえ花が活けられ、果物やお菓子が食べ切れないほど持ち込まれた。あちらからもこちらからも招待の申し出があり、断わるのに随分苦労したものであった。毎日のように新聞や雑誌の関係者が取材に訪れ、まるで竜宮城の浦島太郎のような生活が続いた。陸軍病院を出たばかりの寮生たちはなかなか鼻息が荒く、職員や記者連を手こずらしたものだった。地方の盲学校で3年間、全く一般学生と同じように生活し、その先頭に立って勉強してきた私には、まさに夢のような日々だった」（近藤，1974）

続けて他の失明軍人の松井新二郎は、院内訓練についてこのような訓練の大切さをこう評価している。

「私は、ここには次代に伝えるべき大きな意味があると考えるのです。それは、私のような体験をした者の使命だと思います。戦争の落とし子という側面はあるにせよ、外国にも例のないような理想的な福祉があったことは、これからの日本の福祉社会を考える上で、大いに参考すべきだと思います。」（松井，1990）

このように、上記の失明軍人の自叙伝によると、国と国民は彼らを手厚く保護し受け入れていたのであった。

失明軍人が既存の盲人とはまったく異なる扱いを社会的に受けていたのは明らかであった。このような扱いを国にも国民にも受けていた失明軍人は、国民の一部である一般の盲人のための日本点字図書館事業の発展に大きな存在であることを誇りに思っていたのではないかと思われる。つまり、先述のように、本研究の対象である昭和初期にあまり点字図書館を利用していなかったが、点字図書館の数々の式典に出席することで、自らの受けた手厚い保護や受け入れの恩返しの一部を果たすことができると感じていたと考えられる。

Ⅵ. 引用文献

『朝日新聞』1941年11月28日付

近藤新二郎（1997）盲人たちの自叙伝7　試練を越えて．愛盲報恩会，93.

『大阪朝日新聞』1941年5月21日付

『大阪毎日新聞』1938年11月8日付

井上當蔵（1943）点字奉公会主旨．点字奉公会，7.

加藤康昭（1972）盲教育史研究序説．東峰書房，39.

斉藤恒子（1962）我が国における点字図書館の歴史―日

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

本点字図書館を中心として―．日本点字図書館，7，28.
世界盲人百科事典編集委員会（1972）世界盲人百科事典．日本ライトハウス，485.
谷合侑（1998）盲人福祉事業の歴史．明石書店，47.
『東京朝日新聞』1938年８月４日付
『東京朝日新聞』1938年８月22日付
『東京朝日新聞』1938年９月３日付
『東京朝日新聞』1939年７月11日付
日本点字図書館50年史編集委員会（1994）日本点字図書館50年史．日本点字図書館，85.
日本盲人図書館（1942）昭和16年度事業概要．日本盲人図書館，1.
野口武悟（2005）戦前時日本における障害者サービスの展開―障害者自身の図書館サービスをめぐる運動と実践を中心に―．図書館文化史研究，22，74-88.
本間一夫（1941）日本盲人図書館開設１周年．日本盲人図書館，53-61.
本間一夫（1943）大日本点訳奉仕団概要．日本盲人図書館，4-7.
本間一夫（1980）指と耳で読む．岩波書店，61-68.
本間一夫（2001）我が人生「日本点字図書館」．日本図書センター，12.
松井新二郎（1990）盲人たちの自叙伝10　手の中の顔「視覚障害者の自立」の夢を追いつづけた失明者の記録．橘出版，34-36.
『読売新聞』1906年10月27日付
『読売新聞』1939年４月２日付
『読売新聞』1939年４月５日付
『読売新聞』1939年４月６日付
『読売新聞』1942年７月30日付
『読売新聞』1942年12月11日付
『読売新聞』1943年２月26日付
『読売新聞』1965年８月15日付

注

1）日本点字図書館は戦局の悪化のために２回疎開した。１回目は、茨城県結城郡総上村、２回目は本間一夫の郷里である北海道増毛町であり、その疎開は４年間に及んだ（1944～1948（昭和19～23）年）。疎開中も、貸出事業は疎開先から郵便で本間夫妻によって続けられた。そして、点訳図書も絶えず点訳奉仕者によって点訳され、東京から届けられた。

2）失明傷痍軍人教育所の最も大きな特徴は、鍼按科に限定されていた他の盲学校の職業教育とは異なり、新職業開拓の研究や訓練も、それぞれの専門機関・企業の委託によって実施していた点である。

なお、1944（昭和19）年度において、失明傷痍軍人教育所で鍼按以外の職業を希望した者の内訳は次の通りである。

工場勤務（十数名）
音楽家（４名）
ピアノ調律師（３名）
縄製造、箒製造（各２名）
ラジオ製作、自転車組立、無線電信授受、養鶏業（各１名）

3）戦傷病者援護施策において用いられていた障害等級表は以下の通りである。

障害の程度	障害の状態
特別項症	両眼の視力が明暗を弁別できないもの
第１項症	両眼の視力が視標0.1を0.5メートル以上で弁別できないもの
第２項症	両眼の視力が視標0.1を１メートル以上で弁別できないもの
第３項症	
第４項症	両眼の視力が視標0.1を２メートル以上で弁別できないもの
第５項症	１眼の視力が視標0.1を0.5メートル以上で弁別できないもの
第６項症	１眼の視力が視標0.1を１メートル以上で弁別できないもの
第１款症	１眼の視力が視標0.1を２メートル以上で弁別できないもの
第２款症	１眼の視力が視標0.1を2.5メートル以上で弁別できないもの
第３款症	１眼の視力が視標0.1を3.5メートル以上で弁別できないもの
第４款症	
第５款症	1眼の視力が0.1に満たないもの
第１目症	1眼の視力が0.2に満たないもの
第２目症	

出典：世界盲人百科事典編集委員会『世界盲人百科事典（日本ライトハウス(1972)の485ページ）より作成。

―― 2010.8.31 受稿、2011.1.27 受理 ――

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

J. J. Disa. Sci. 35, 95－107, 2011

The role of blind soldiers as a factor of the continuation and undertaking of the Japan Braille library in the early Showa period

Karami MASUME* and Kiyohiko KAWAUCHI**

The purpose of this study is to examine the factors which led to the continuation of the Japan Braille library and their background in the early Showa period. Despite being in a difficult situation of war, and without receiving any financial aid from the government, the Japan Braille library continued its development. From this point of view, the Japan Braille library was different from the former library which, when confronted with all sorts of problems, closed down. It is said that the Japan Braille library could overcome this difficult period due to two main reasons; 1) The Braille Transcription Movement and 2) Financial aids.

The Braille Transcription Movement especially was a major factor in the continued efforts to build a Braille library. The biggest obstacle at the time was filling the lacking Braille library with books, which would enable the establishment of a Braille library in Japan. The Braille Transcription Movement supported the Japan Braille library from the beginning, and was positively received by the people centered in Tokyo who sympathized with the ever increasing number of blind soldiers coming back from war and wanted to help them.

The library staff's continued efforts to establish the Japan Braille library was helped by the Braille Transcription Movement and the financial aid they received from society during the war. It is thought that the large number of blind soldiers who suffered with the flawed and underdeveloped Braille system was a contributing factor in the development and of the Japan Braille library.

Key words: Japan Braille library, The Braille Transcription Movement, blind soldiers

* Graduate course of Disability Sciences, University of Tsukuba

** Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Institute of Disability Sciences, University of Tsukuba

NII-Electronic Library Service